

2020 年 12 月 13 日（日）「出口は何処に」

《聖書協会共同訳》コヘレトの言葉 6:10-12

- 10 すでに存在するものは名前と呼ばれる。
人間とは何者なのかも知られている。人は自分より強い者を訴えることはできない。
- 11 言葉が増せば、空しさも増す。それが人にとって何の益になるのか。
- 12 空である短い人生の日々に、人にとって何が幸せかを誰が知るのだろう。人はその人生を影のように過ごす。その後何が起こるかを、太陽の下、誰も人に告げることができない。

《新改訳 2017》伝道者の書 6:10-12

- 10 存在するようになったものは、すでにその名がつけられ、それが人間であることも知られている。その人は、自分より力のある者と言い争うことはできない。
- 11 多く語れば、それだけ空しさを増す。それは、人にとって何の益になるだろうか。
- 12 だれが知るだろうか。影のように過ごす、空しい人生において、何が人のために良いことなのかを。だれが人に告げることができるだろうか。その人の後に、日の下で何が起こるかを。

【序論】

今日でコヘレト 6 章が終わります。今回を年内に本書から語る最後の説教とし（7 章以下は年が明けてから）、来主日はクリスマスのメッセージを語る予定です。6 章を終えるにあたって、5:7 からここまで語られてきた「貧困と富」の問題にひとまずの決着をつけたいと思います（説教としては 7 回目）。今日の箇所には「富」に関する直接的な言及はありませんが、人が人生で手に入れるものはすべて受動的に与えられたものであり、自分の力でどうこうなるものではないという点において、同じ文脈上にあります。それは、富だけでなく、生まれた場所も、家族も、能力も、飲食や労働の楽しみも、すべては定めの下で与えられているものなのだと。著者は人の人生とは神の支配下にあり、すべてが聖定（永遠の昔に定められた聖きご計画）の下にあることを強調しています。

【本論】

本論 1. 神の支配下にある人間

すでに存在するものは名前と呼ばれる。（6:10a）

まず「名前」についての言及があります。人の名前は多くの場合親が付けるでしょう。

あるいは、祖父母の場合もあります。また、神道では姓名判断による「名付け」が行なわれたりもします。牧師人生で「この子に名前を付けてください」と頼まれたことはまだありませんが、我が家の二人の子どもたちの名前は夫婦で祈りをもって考えました。その他、数少ない「名付け」の経験としては、小学生の頃に飼い始めた真っ白なネコに「シロ」という名前を付けたことくらいでしょうか。

名前を付けるという行為は、この地上ではおそらく言語を持つ人間しかやらないことでしょう。動物の間でも微妙な声色の違いで呼ぶ相手の区別がなされているのかもしれませんが、文字として表すことはできません。子どもに対する「名付け」には、「こういう人生を歩んでほしい」という親の願いが込められていることが多いと思われますが、旧約聖書では特にその子が生まれてきた状況に照らして名前が付けられる傾向がありました。例として、エサウとヤコブの誕生が挙げられるでしょう。

初めに出て来た子は赤くて、全身、毛の衣のようであった。それでその子をエサウと名付けた。その後で弟が出て来たが、その手はエサウのかかとをつかんでいた。それでその子をヤコブと名付けた。(創世 25:25-26)

後になって、「ヤコブ」という名前は災いと結びつき、兄の長子の権利を奪ったときにこう言われました。

エサウは言った。「あの男がヤコブと呼ばれるのは、二度もこの私を押しのかたからなのだ。私の長子の権利を奪いながら、今度は私の祝福を奪ってしまった。」(創世 25:36)

このように、聖書において「名前」とは、そのものの性格・人格・存在自体を表すものでした。神は「人」をお造りになり、土（アダマ）から成るその存在を「アダム」と呼ばれました（創世 2:7「**神である主は、土（アダマ）の塵で人（アダム）を形づくり…**」）。そのアダムは地に群がる動植物に名前を付ける責任が与えられました（創世 2:19-20）。この、人間による被造物への「名付け」には、ただ単に名前のタグ付けをしたということ以上の意味があり、人類に地を支配（管理）する責任が託されたことを象徴しているでしょう。しかし、創世記 1 章に遡ると、それ以前に神が被造物全体にもっと広い意味での名付けをなさっていたことが分かります。

神は乾いた所を地と呼び、水の集まった所を海と呼ばれた。神は見て良しとされた。

(創世 1:10)

この「名付け」はいちいち言及されていませんが、すべての領域においてなされたはずです。つまり人間は、神が全体に名を付けられた（その支配権を明らかにされた）ものの上で、代理としての使命を果たしたにすぎないのです。神の支配下にある者が、地の管理責任を託されたということになる。

人間とは何者なのかも知られている。人は自分より強い者を訴えることはできない。

(6:10b)

「人間とは何者なのかも知られている」というフレーズは、人間とはどのような物質で造られていて、どのような性質を有するかが完全に（神によって）知られていることを表します。その次の「人は自分より強い者を訴えることはできない」という部分はやや解釈が難しいですが、以上の文脈で見えていくと「自分より強い者」とは神を表していることが分かるでしょう。人間は有限で弱い存在であり、無限なる方の前になす術がない。パウロも同様のことを言っています。

そこで、あなたは言うでしょう。「ではなぜ、神はなお人を責められるのか。神の御心に誰が逆らうことができようか。」ああ、人よ。神に口答えするとは、あなたは何者か。造られたものが造った者に、「どうして私をこのように造ったのか」と言えるでしょうか。陶工は、同じ粘土の塊から、一つを貴い器に、一つを卑しい器に作る権限があるのではないか。

(ローマ 9:19-21)

コヘレトは言います。だから神に対して多くを語らないようにしよう。

言葉が増せば、空しさも増す。それが人にとって何の益になるのか。(6:11)

10 節で言われていたように、人間は神の支配下にあつて、その許容された範囲内で生きている存在なのだから、神に対してあれこれ不平不満を言うことは無益だということが言われています。あれこれ語れば語るほど空回りしてしまうと。

全員が全員、自分の生まれや育ちについて満足しているわけではありません。親を選ぶことができなければ、生まれてくる国や地域を選べるわけでもない。その家庭が豊かであるかどうか、子どもには選択することはできないのです。平和な時代に生まれる者と激戦区に生まれる者、王族に生まれる者と低いカーストの下に生まれてくる者、十分な教育を受けられる者とそうでない者、やさしい親に育てられる者と厳しい家庭環境に生まれてくる者。挙げればきりがありませんが、いずれにしても人間は受動的にその人生を受け取り始めます。後から「こうであつたらよかったのに」とどんなに叫んでも、「受けた」事柄を変えることはできないのです。

コヘレトはこの変えることのできない現実を見て、「人生とは無意味ではないか」「出口がないではないか」と訴えます。神にどんなに苦情を述べても、すべてが定まっているのであれば、もう逃げ場所はどこにもないと。この「行き詰まり」を「袋小路」と呼ぶことができるでしょう。

本論 3. 出口なき影のごとき人生

空である短い人生の日々に、人にとって何が幸せかを誰が知るのだろうか。人はその人生を影のように過ごす。その後何が起こるかを、太陽の下、誰も人に告げることができない。(6:12) 本節の中で、読者の耳に印象深く響いてくる「影」という言葉があります。ここで言われている「影」とは、人生のはかなさ、人間のもろさを表しているようです。人間の一生とは斯くも短く、その中で「何が幸せか」「何が人のために良いことなのか」新改訳2017)を明らかにすることは困難である。そもそも「幸せ」という言葉自体が極めて主観的なものであるということを、以前に考えました。更に「その後何が起こるか…誰も人に告げることができない」。すなわち人生の幕を閉じた後で何が起こるのかも知り得ないと。ここでコヘレトは「死後のいのち」という思想を一旦脇に置き、あくまでも「太陽の下」(神なしの世界観)の行き着く先を追求します。その到達点はどこまでも「空」(無意味)であると。

「人生とは影のごとし」と聞くとときに思い出す、プラトンのイデア思想に少しだけふれておきましょう。紀元前5～4世紀の哲学者プラトンは、「イデア」という言葉を用いて、人の魂がかつて見ていた天上の世界の「ものごとの真の姿」「ものごとの原型」というものを思い描きます。

我々の魂は、かつて天上の世界にいてイデアだけを見て暮らしていたのだが、その汚れのために地上の世界に追放され、肉体(ソーマ)という牢獄(セーマ)に押し込められてしまった。そして、この地上へ降りる途中で、忘却(レテ)の河を渡ったため、以前は見ていたイデアをほとんど忘れてしまった。だが、この世界でイデアの模像である個物を見ると、その忘れてしまっていたイデアをおぼろげながらに思い出す。このように我々が眼を外界ではなく魂の内面へと向けなおし、かつて見ていたイデアを想起するとき、我々はものごとをその原型に即して、真に認識することになる。(Wikipedia)

プラトンの思想は二元論であり、聖書的な世界観とは根本的に異なりますが¹、墮落した人間の本性では神の御旨が見えなくなっていることを、哲学的な視座から説明しようとしているようにも見えます。

確かに聖書は言います。人間は、生まれながらの知恵によっては、善悪を見極めることができない。真の幸せが何であるかも分からない。思いのまま、欲望に従って生きるとき、その行き着く先には「空」という結末がある。そして、すべては死とともに取り

¹ 聖書は、天上は善で地上は悪という分け方をしているのではなく、地もまた神の愛の対象であり、神の管理下にあるとする。

去られる。何も残らず、何の意味もなかった人生。100 のものを得ても、1000 のものを得ても、ゼロが掛けられ、すべてはゼロとなる。それが神なしの世界観の到達点なのです。

【結論】

6 章はこのように、読者を袋小路に閉じ込めて終わっているように見えます。しかしながら、もうお分かりのように、コヘレトには常に脇に置いている一つの答えがあります。「それなら神を知ろうではないか」という提案です。神によって聖定されているという事実を、感謝をもって受け入れようではないか。この神が根源的に「良い方」であるならば、従うときに良いもので満ち溢れさせてくださるはずではないか。また、ここには明確に書かれてはいませんが、人間には死後の状態があり、神と出会い、神の審きに遭い、永遠の行き先が決定づけられるということが本書の最後に述べられています(12:13-14)。新約では「永遠のいのち」の思想がはるか先まで進み、救い主イエス・キリストにおいてそれがもたらされると約束されます。旧約には限界がありますが、神と共に歩むこと、神に聞き従うことが答えとして呈示されています。コヘレトは敢えて「太陽の下」の人生の袋小路を示し、そこからの出口、すなわち神と共に生きる道を開き示しているのです。キリスト者は、その鍵を握る人物こそ救い主イエス・キリストであることを知らされているのです。

【祈り】

万物を聖きご計画のうちに創造し給うた、天の父なる神様。人の一生とは、無限とも思える宇宙の歴史の中で、何と小さきものでしょうか。しかし、この人生にもあなたの尊い御旨が置かれていることを覚えます。神なしに生きるころには空しさだけが残りますが、神との永遠の交わりの内を生きる時、この人生は地上で終わるものではないことを知ります。神を畏れ、神との契約の内を歩ませてください。その架け橋として地上に降られた私たちの救い主イエス・キリストを信じます。来週はクリスマス礼拝を迎えますが、主につながる一人ひとりが自らを整え、また多くの人が神を知る日となりますよう、お導きください。

【祝祷】

仰ぎ願わくは、

聖き御旨をもって万物を創造し、すべてのことに時を定め給うた、父なる神の愛、
神なき空虚な人生にいのちを注ぎ、天地の架け橋となり給うた、主イエス・キリストの
恵み、

袋小路に扉を開き、永遠への道へと導き給う、聖霊の親しき交わりが、
あなたがた一同の上に、限りなくあらんことを。